

今から朗読させていただきますのは、合志市に在住されていた、元教師 藤本フサコさんの本の一文です。

藤本様は、大正六年生まれ。現在の熊本県立第一高校から、女子師範を卒業され、昭和十一年に小学校に勤務。途中、休職を含み昭和三十七年に復職され、昭和五十年にご退職されました。

それでは、当時の菊池恵楓園の子どもたちに思いを馳せながら、朗読させていただきます。

忘れえぬ子どもたち

「ハンセン病療養所のかたすみで・

ある女教師の回想・」

藤本フサコ

セイジヨウチタイ（清浄地帯）

私が勤めることとなった学校は、小中併設で、小学校は合志（こうし）小学校の、中学は合志（こうし）中学校の分校になっていた。私の方は、合志小学校恵楓園分校と呼ばれて、教師は私一人、中学は男女合わせて四名

の教師で合計五名、それぞれ本校からの派遣教員という形となっていた。

卒業、入学、始業式、終業式などには、両方の校長が来られるし、また本校の大きい行事や職員会議などには私たちも呼ばれて出席した。

私は同じ合志に二十数年も住んでいながら、それまで恵楓園とは全く何のかかわりも持たずに過してきただけに何の予備知識もなく、どんな子ども達がいっているのか、考えたこともなかった。それに私自身、教員を辞めてからすでに16年ものブランクがあり、もうすっかり主婦であり母親の感覚が身に沁みついている、何かにつけておおよそプロの教師ではなかったのである。「子どもたちが先生を首を長く（長く）して待つとる。はよう（早く）行ってやらんと（やらなければ）」と本校の教頭先生から言われた言葉が妙に私の心を重くした。前任の女先生は病気がちで長欠のまま退職されて、その後を本校の教頭と園に毎日当直する青年S先生とで補欠授業がなされていたのであった。

中学の先生一同は、まるで新卒教師のように、不安げ

な私を大変に優しく迎えてくださったし、当の子ども達もみんな待っていてくれた。

当時小学生は、6年が男子1名、女子2名の3名、2年が女子1名で、この2年の女の子が今でも便りをくれる悦子なのである。中学には、十七、八名いたように思う。

職員室から学校までは二百メートルくらいもあったろうか。舗装された道を挟んで横一列に入所者の住宅が幾棟も並んでいた。

その道を通り抜けて右へ曲がると、学校の全容が目に入る。初めて見る学校は、私の予想よりもはるかに大きく立派なものであった。運動場も広かった。「かつてはこれだけの教室を必要としたのかなあと」思いながら、私はこれから私が教えることになる子どもたちの先輩の通学を繞（めぐ）って世間が騒いだ事件（合志市出身の中山節夫監督によって映画「あつい壁」に描かれた黒髪校の登校拒否事件）のことをふっと思い起した。

全生徒に紹介があった後、小学校の子どもたちの教室に行くと、三人の子たちが肩を寄せ合うようにして待つ

ていた。私は教室に入るなり緊張した。未知の先生に対する精いっぱいに関心と期待とをこめた嬉しそうな瞳が、まともに私に向けられたからである。男の子も女の子二人もさっぱりした服装で、利口そうな顔をしていた。男の子の片腕が少し悪かった他は、私の見たところではみんな普通のこととなんら変わるところはなかった。

二年の悦子はちょうど入院中であつた。悦子は幼い時の股関節脱臼の処置が適切でなかったのか、今その治療中であり、彼女はハンセン病ではないが園の拡張の際に入園したらしいと主任の先生は説明された。

職員室の裏、二メートルくらいの所にコンクリートの高くて長い塀があつた。その向こうに病棟があり、入院室があつた。主任の先生が入院中の悦子を見舞うために私を案内して下さいました。

大勢の入院患者に混じって、悦子は奥の方に小さく、まるで人形を寝せたように幼い顔で寝ていた。

枕元には人形やぬいぐるみなどが並べてあつた。きっと大人の人たちからもらったのであろう。悦子は足を牽引

している様子だった。突然訪れた私に対して、悦子には特別どうという思いもないらしく、無表情であった。病室の人たちはもの珍しそうに私を見た。それは私にとっても初めて目にする病室風景であった。

病棟からの帰り、門衛（もんえい）が詰めておられた園の入り口の前で主任の先生が「この塀からこちら側はセイジヨウチタイ（清浄地帯）」と言われた。私達の職員室も恵楓園の本館も、その部分にあった。私は初めて聞くその言葉の意味を測りかねたが、妙に心に残る言葉だった。

私の着任の翌日、それまでいろいろな都合でのびのびになっていた小中合同の春の遠足が行われた。

園所有のバスに乗り、行先は阿蘇。参加したのは中学生、小学生、教師ほか総員二十五、六名であった。ここでは遠足などの学外行事を行うにあたっては幾つかの手続きが必要であるらしかったが、着任したばかりの私にそんな難しいことがわかるはずもなかった。

遠足といえば、大勢の児童がリュックサックの鈴を鳴らしながら長い列をつくってにぎやかに歩くという図

が思い浮かぶが、その遠足は参加人数の多寡（たか「多少」）の違いだけではなく、どこか人目を憚（はばか）るような感じで、およそ一般の学校の遠足の雰囲気からはかけ離れたものだった。

目的地に着くと、トイレに行っていた男の子が私のところに走って来た。

「びっくりしたなあ。よそのおばさんが、『ああた（あなた）たちはどこの学校な』と聞くので、何と言おうかと思って、『大池学校』（近くの地域の名）と答えた」彼の口調は何か恐ろしいものにも出会った時のように早口であった。

私はそれを聞いて、胸を打たれる思いがした。そのおばさんがなんと思って尋ねたかはわからない。私だって観光地などで出会う児童に、ただ何となく「どこの学校？」と聞くこともあるからだ。しかし、自分が通う学校名を口外してはならないものと思っている彼は、そう問いかけられただけで、とっさの答えに窮（きゆう）して、まるで咎（とが）められでもしたかのように感じたのであろう。

いよいよ昼食の時になった。子どもたちは心得たように自分たちだけで、私たち教師から離れて坐（ざ）を占（し）めた（すわった）。私は食事をしながら、ちらっちらっと子どもたちの方を見やって、心ならずも故郷を離れてこうしている彼らが不憫（ふびん）でならなかった。

わが想い極まるところただ一つ

愛しき子らに恙^{つつが}あらすな

今お読みしました「忘れえぬ子どもたち」は、当時教師であった藤本フサコさんが書かれました。菊池恵楓園の中での出会いや出来事を基にした本です。らい予防法により強制隔離させられた子どもたちの苦悩や恵楓園分校の教師であった藤本さんの思いが、当時の情景とともに脳裏に浮かんできます。

ハンセン病は感染力が弱い病気であるにもかかわらず、隔離政策や差別を作り出してきました。私たちはこのハンセン病に対する差別の現実から深く学び、これか

ら子どもたちが安心して生きていける差別のない社会をつくっていかねばなりません。

これで、朗読を終わります。ありがとうございました。